

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき。

讃岐の金毘羅酒として親しまれきた金陵が、酒づくりの贅をつつておくりした「清酒煌」。金陵の歴史は今をさかのぼる(三〇)余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金毘羅さんの贅ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味わいは、金毘羅詣の人々からも広く親しまれてきました。酒酒「煌」のえも言われぬ風味と「煌」には、金陵の心意気と酒づくりの神髄が細やかに思っています。

真珠玉のべとく搗きあげ

水品のべとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒煌に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のむすみから割はらの、まるで真珠玉のようなぶだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「醗、二醗三造り」といわれいるとおり複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつとめてきた。

つごなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるまに精魂をこめ、技の限りを尽くして低温でじっくりくりあげ。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米びから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。

芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品。この稀なる清酒煌を、日本酒をこたく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

煌
金陵
超特撰

税込 標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町四六三 電話(〇八七七)三三三三
未発酵の清酒は常温で保ちます。紙瓶中や授乳期の飲酒は控えてください。

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第92号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集

背番号—その意味

絵と文  ムクゲ

八十の手習い始末

ほろ酔い詩歌紀行

「邪宗」のこと、など

私の童謡

豆腐の話

万年筆に戻った

異郷の人々

池井 優 …… 4

中西 美子 …… 7

高橋 和島 …… 8

日高 昭二 …… 10

安森 敏隆 …… 12

内野 潤子 …… 14

志村 有弘 …… 16

片岡 義男 …… 18

宮地 智子 …… 20



絵と文

破壊されたパルミラの遺跡

さかもと ふさ …… 23

作品制作という特殊な行為

志村 栄至 …… 24

近況報告

山西 無聞 …… 26

絵と文

大型クレーン船

佐川 毅彦 …… 29

熊本城へ

永岡 慶之助 …… 30

妙音

山本 千明 …… 32

与えられる偶然の出会いを楽しむ、思う

宮本 富夫 …… 34

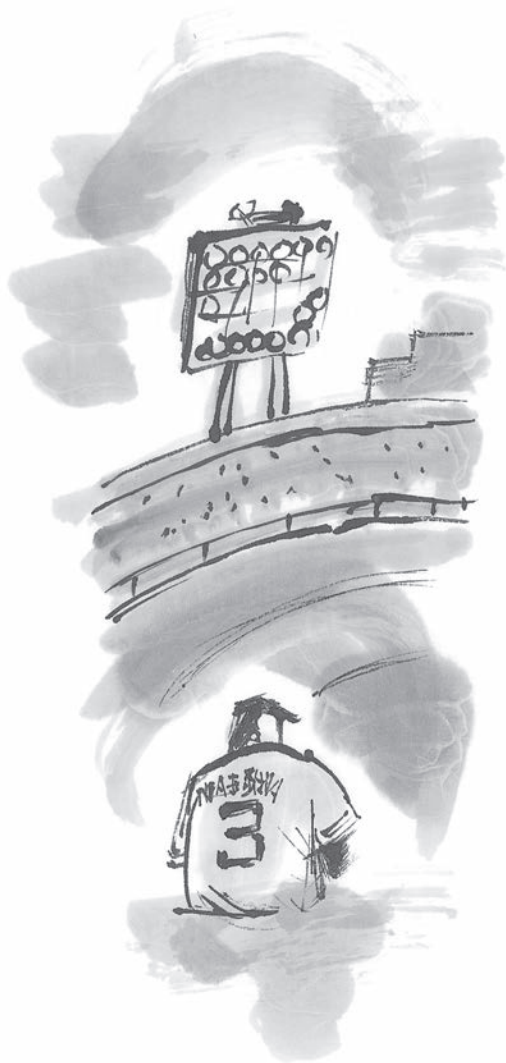
方谷先生かく行なひき 河井継之助篇

池田 一貴 …… 37

表紙・グラビア …… 総本山 善通寺

背番号—その意味

池井 優
(慶應義塾大学名誉教授)



栄光の背番号3

「四番サード、ナガシマ、背番号3

……」

カクテル光線に照らされた後楽園球

場にうぐいす嬢の声が響き渡った。ア
ナウンスを待って「ウォー」という歓
声が客席からあがる。千両役者の登場
だ。

戦後日本プロ野球が生んだ最大の
スーパースター長嶋茂雄、昭和天皇が
観戦された巨人阪神戦—天覧試合のサ
ヨナラホームランなどチームメイト背

番号1の王がホームランの通算記録、三冠王など「記録に残るスター」なら長嶋はまさに「記憶に残るスター」であった。

そして十六年に及ぶ選手生活を終えて現役生活に終止符を打った一九七四年十月十四日、後楽園球場のマウンドに立った長嶋は「私は今日、引退をいたしますが、わが巨人軍は永久に不滅です」と全国のファンを感動させた引退セレモニーに臨んだ。そのバックには「栄光の背番号3」が電光掲示板に浮かび上がっていた。

長嶋が東京六大学の通算ホームラン記録をひっさげて立教大学から昭和三十三年全国のファンが注目するなか巨人に入団したのは周知のことだが、では長嶋は学生時代何番の背番号をつけていたのであろうか。正解は「なし」である。東京六大学野球で背番号が導入されたのは、長嶋がプロ入りした翌年の昭和三十四年春のシーズンからであった。学生野球はプロと違って背番号などつける必要はないとの考え

が主流であったのだ。長嶋入団によるプロ野球人気にならって学生野球も背番号をつけることになったという。

背番号と「永久欠番」のはじめ

ユニフォームの背中に番号をつけるというアイディアはいっつ生まれただのあろうか。それは一九二九年のことであった。ファンにとって選手を判りやすくするためにはどうするか。ポジション別に帽子の色を変えるなどいろいろやってみたが、背中に大きく番号をつけるのが「一番判りやすい」となり、最初に実行に踏み切ったのはニューヨーク・ヤンキースであった。打順に従って1、2、3、4…と付ける。当時のヤンキースは三番ベープ・ルース、四番ルー・ゲーリッグの強力打線を組んでいたから必然的にルースは3、ゲーリッグは4の番号を背中に背負うことになったのだ。

「鉄の馬」(アイアン・ホース)のニックネームが示すように頑健な体で二二三〇試合連続出場の大記録を打ち

立てたゲーリッグだったが、筋萎縮性側索硬化症という奇病に見舞われ、一九三九年七月四日独立記念日にヤンキー・スタジアムを埋めた満員の観客を前に「自分は世界で一番幸せな男でした」と挨拶してダッグアウトに消え引退した。ゲーリッグの功績を讃えるためその背番号4は二度とヤンキースの選手には使わせない「永久欠番」とすることにした。以後、ベープ・ルースの3をはじめ看板選手が引退するとその選手の背番号を欠番とする風潮が他チームにも広がり、当然日本のプロ野球界も取り入れることになった。

平凡な番号が歴史を刻む

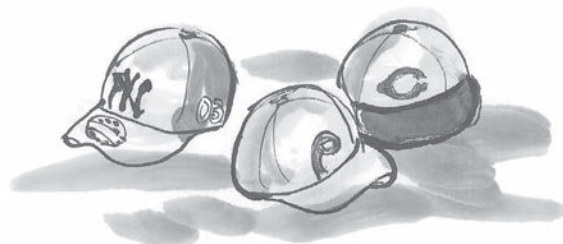
なんと大リーグには三十球団すべてが使わない番号がある。42だ。大リーグの黒人選手第一号ジャッキー・ロビンソンがつけていた背番号である。一九四七年ロビンソンは当時ニューヨークの下町ブルックリンにフランチャイズを構えていたドジャースに入団した。黒人選手が大リーグに加わっ

てはならないとの規定はどこにもなかったが、黒人は彼らだけの「ニグロ・リーグ」でプレーするのが当然とされ、門戸は閉ざされていたのだ。ドジャースのGMブランチ・リッキーは「これからは黒人選手のパワーを無視することはできない」と採用に踏み切った。予想されたとはいえ、ロビンソンはあらゆる迫害、いやがらせを受けた。白人選手と同じホテルに宿泊できない、同じレストランで食事さえとれない、球場にいけば相手チームや心ない観客から嫌がらせを受け、差別的な野次が容赦なく浴びせられた。「あらゆる苦難に耐えて自分が頑張らなければ、今後黒人選手の大リーグへの道はない」とロビンソンは攻守走に抜群の能力を発揮し、新人王に輝いた。その功績を讃え、42は全球団を通じての「永久欠番」となり、毎年選ばれる新人王は「ジャッキー・ロビンソン・アワード」の名前をつけられ、野茂英雄が受賞した折は、ロビンソン夫人から直接手渡されたのであっ

た。

背番号は好評だった。やがて背中だけでなく、ユニフォームの胸の部分にも入れるチームが出てくる。遂には背番号の上に名前を表示することが普通になった。短い名前なら簡単だ。ロー（LO）、李（LI）など二字から問題ないが、ニューヨーク・メッツの若きエースシンダーガード（SYNDERGARD）のように長いスペリングになると背中からはみ出しそうになる。背番号を最初に採用したヤンキースは伝統あるチームのプライドか、胸番号も背文字も拒否して今日に至っている。

マリナーズ・ヤンキース・マーリンズと三球団でプレーし、日米通算でピート・ローズの持つ通算安打記録を塗り替えたイチローの51は果たしてどのチームで永久欠番になるであろうか。



ムクゲ

中西美子



暑い夏の日、日差しを避けて木陰にちよつと入ることがあります。大した木陰でもなくても、花が咲いていれば嬉しいものです。最初、父からハチスと聞いた覚えがあります、ムクゲでした。ハチスとかムクゲとか、あまり耳障りのいいなまえではないし、変な名前と思っていましたがいつの間にか慣れてしまうものです。韓国の国花でもあります。日本には、古くからあつたようです。ここに描いたものは、宗旦ムクゲといい白地に赤のかわいい花です。利休の孫の宗旦が好んで茶花に使ったそうです。夏の日差しに次々と花をつけるムクゲは、根があまり張らず庭木にも垣根、街路樹に重宝がられているようです。剪定にも強く、よく刈り込まれています。が、ほつとくと十メートルにもなるというから驚きます。花の種類も多様でピンクや白、重に八重、夏から秋の暑い中さわやかに屋外を飾ってくれています。息子の通園のたびに一輪摘んで幼稚園の可愛い先生にプレゼントしていたのを思い出しました。

八十の手習い始末



高橋 和島

(作家・郷土史家)

ひまを持て余しているとみられて
いるのだろう。七十過ぎてから趣味の集
いに誘われることが多くなった。

まず、声をかけられたのが里山を歩
く会。入会はしなかったものの、地元
山の魅力を知るきっかけとなり、ボケ
防止になるという医者という言葉を盲信
し、今では近隣の山を独りでほぼ毎日
一時間半、一万歩ほど杖を頼りに、よ
たよた歩いていく。

次は俳句、川柳、短歌を詠む短詩の
会。メンバーは同じ町に住む六十代か
ら九十代までの男女約十人。例会は月
一回。会場は軽食を楽しみながらとい

うことで喫茶店。いっこうに上達せ
ず、自己満足の域を出ない作品しかつ
くれないが、どうにか八年続いている。

三番目に誘われたのは詩吟の会。若
い頃から興味を持っていた分野なので
大して迷いもせず稽古を見学させても
らうことに。メンバーは四十前後の女
性から九十過ぎの男性までの男女十人
余。

詩吟の予備知識は頼山陽の鞭声肅々
を耳にした程度。見学して判ったこ
とが少なからずある。例えば漢詩、
和歌、短歌、俳句、新体詩とカパーし
ている範囲の広さ。「詩吟」なのだか

ら、あらゆる詩が対象になっても不
思議はないわけだが、陶淵明も白居易
も、山部赤人も在原業平も、芭蕉も蕪
村も、牧水も藤村も……が、似たよう
な節回しで吟じられるのだ。ふーんと
思わずにはいられない。

こうしたことも含め、おもしろそう
だとは思うものの入門は保留してい
る。生来の音痴に加え、耳が悪くな
り、声も出なくなった高齢の今、始め
てみてもはた迷惑なだけではないとい
う逡巡があるせいだ。

詩吟は節回しが単調なだけに歌謡曲
などより音程がきっちりとならずには

いけないだろうし、声量も要る。老人の趣味なぞ自分が楽しければいいと言う人もいるが、ひとに不快感を与える騒音を撒き散らすだけの存在にはなりたくない。

四番目は始めて半年足らずの茶の湯。

わたしのようながサツ者には縁遠い趣味に首を突っ込むことになったきっかけは、九十過ぎの知人が茶の湯をやりたいが免許証を返上したため車に乗れなくなり、稽古に行けないーという話を聞いたから。

畏敬する大先輩だった上、稽古先が車で二十分ほどのところ。ならば当方が送り迎えさせていただきましょう。ついで当方も茶の湯を習わせていただくことにします、という運びになった。ついでに……と言ってしまったのは、茶の湯には何かありそうだ。たとえ何もなくても非日常的な時間を過ごすのも悪くはないだろうと、余計なことを考えたことに加え、その茶の湯が織部流だったため。

稽古先の隣町岐阜県土岐市は、鎌倉

時代から焼物づくりの歴史を持ち、市内の窯跡から織部焼の名で知られる釉陶器が大量に出土している。このため利休の弟子であり、信長、秀吉、家康に仕えた茶人大名の古田織部が何らかの形で同市の焼物づくりと関わりを持ったものとみなされ、同市および近隣の町には織部の名を冠した通りや建物が幾つもある。織部流はこの古田織部の教えであり、利休の茶の湯に対し、武家のそれと位置づけられている。

手元にある茶の湯の入門書目次を見ると、稽古の基礎という章に立ち居ふるまい、袱紗のたたみ方、つけ方、さばき方、茶中のたたみ方、茶碗のふき方などという文字が並ぶ。始めたばかりのわたしが今、稽古でくりかえし教えられているのはこれらだ。

進み方が少し遅いのではないかと思わないでもないが、月一回の稽古に向くと、九十二歳の先輩も七十九歳のわたしも前回教えられたことをよく覚えておらず（というより大方は忘れてる）しばしばうろたえる。したがっ

て、先を急いでもらわないほうがありがたい。

今後の稽古は、前出入門書目次によると、茶杓を清める、茶筌通し、茶筌すぎ、茶杓の扱い……といった運びのようだが、同様に急いで進めてもらう必要はない。

風炉を前に茶杓を手にして客に茶を点てる日がくることを夢見ないでもないが、老眼鏡なしに新聞が読めないのは当然のこと、葉書を書こうにも手が震え、簡単な漢字が思い出せない身である。すべからくゆつくりでいい。

考えてみれば、お茶なぞは、寒い冬なら陽当たりがよく、暑い夏は風通しのいい縁側に座り、馴染み味の塩煎餅か町の和菓子屋の饅頭でも横に置いて、熱い渋茶をすするのが一番だ。きつかけが何であれ、茶の湯の真似事という大それたことを始めたのはボケてきたせいだろう。となると、今後、さらにとんでもない趣味に首を突っ込むおそれがなきにしも……。え？ わたしは知りませんよ。

ほろ酔い詩歌紀行 —— 伊藤一彦の酒

日 高 昭 二
(神奈川県名譽教授)



伊藤一彦は宮崎の歌人である。宮崎に生まれ、いまも宮崎に住んでいる。その彼の最新歌集『土と人と星』（砂子屋書房）の中ほどに「独酌と集飲」と題された歌がある。

刀自と杜氏おなじ語源と柳田は言ふ
日向は女のよく飲める国

柳田とは、周知の民俗学者柳田国男のことだが、彼の言に従えば「刀自」と「杜氏」とは同じ語源だと言うのである。「刀自」はあて字だが、家事をつかさどる婦人、一家の主婦のことで、台所を支配する中に酒のことも含まれているというわけである。また「杜氏」は言うまでもなく酒を醸造す

るものの頭のことである。おそらく、その語源が同じとは、もともと、この二つの語が「戸主」（トヌシ）の音便とされていることからくるのであるう。

それをふまえて伊藤は、日向の女はよく飲むと言い、だからその思いを次のように代弁もする。

来む世には女に生まれ酒飲まむ男の
酒をさらに知るため

彼の言う「男の酒」とは、ではどういふことをさすのか。それが「独酌」と「集飲」にかかわっているのだから、しかし、どちらにしてもよく飲むことにかわりはない。

また伊藤は、同じく柳田の次のような観察、つまり「独酌はたしかに文明治大正時代の発達であつた」の語を用いて、牧水を歌う。

牧水の独り酌む酒は近代の新しき姿
道づれもたず

生涯を旅と酒に過ごした若山牧水の独酌の酒を「新しき姿」と呼び「道づれもたず」と捉えていくところに、伊藤の牧水に対する親炙の念があふれている。宮崎はその牧水の故郷でもあり、伊藤は牧水を現代によりがえらせた立役者だが、だから伊藤の酒が、いつも牧水とともにあることに不思議はない。

道の奥の谷川温泉の宿に来て牧水の
やや酔ひし字に逢ふ

伊藤は、旅人牧水の痕跡を至るところに見出しているが、それは牧水にはとどまらない。伊藤の酒の師といえば、さらに詩人草野心平もいる。

あれこれの福島の酒うまくしてなほ
心平といふ酒ほしき

二日酔ひ三日酔ひさらに六日酔ひ
ほとほと死にき口福の人は

酒の味わかれど酒のころ
まだ分からぬと言ひしさが心平

ここで伊藤が言う「さすが心平」という言葉は、そのまま一彦に贈つてもよい言葉であろう。酒仙心平の姿を、これでもかと言うように発見しては、みずからも酒徒の世界に深入りして行く。

空つばの一升瓶を庭に出し
一晚ちゆうを月光吞ます

したたかに酒をあふりて
人吞まむ酒ニモ負けず人ニモ負けず
はるかなる千年まへの酒の霊
生きてうごめくこの透明に

伊藤の「独酌」が、はるかな時空をこえて「酒の霊」とつながり、それ自身も身体もまるごと「透明」になるかのようだ。

もとより、酒飲みの歌人は、酒のあれこれにも詳しい。その一つに「待酒」という言葉がある。

客人のために舞ひつつ醸みにしを
待酒といふよき言葉なり
みづからが醸せる酒にあらねども
待酒として一献ささぐ

「待酒」とは、来る人に飲ませるた

めにあらかじめ醸造しておく酒のことである。伊藤ならずとも、まさしく「よき言葉」であるが、この言葉は、すでに万葉集にもある。「君がため醸みし待酒安の野に独りや飲まむ友無しにして」（万葉集四、五五五）。

だが、伊藤の酒の歌の中で、思わずうなってしまうのは、そこに次のような光景がみえるからだ。

親すでに世に亡き方に申し訊なけれど
母に酒を注されぬ

伊藤の母は、満百歳をむかえた寅年だという。桜島が大噴火した年に生まれ、千人針をよく縫ったとふりかえられている。そして息子は七十を越えている。「白寿の母」が「古希の息子」に注ぐ酒となれば、言葉は不要であろう。申し訊なさや、羨ましさをこえて、神々しささえ感じさせる光景である。

「邪宗」のこと、など



安 森 敏 隆

(同志社女子大学名誉教授
歌人)

「邪宗」とは、江戸時代に不正な宗教としての切利支丹宗を弾劾するときに使った言葉である。北原白秋の詩集『邪宗門』の最初には、「邪宗門秘曲」がある。白秋は、逆に切支丹に寄せるあこがれの情緒をうたおうとしたものである。だが、この冒頭の詩に先駆けて、明治四十年十月作の「天草雅歌」という作品があり、「邪宗」について次のようにうたっている。

さならずば

わが家の

わが家の可愛ゆき鳩を

その雛を

汝せちに恋ふとしならば、

いでや子よ、

逃れよ、早も邪宗門外道の教、

かくてまた遠き祖より伝へこし

秘密の聖礎

とく柱より取りいでよ。

もし、さならずば

もろもろの麝香のふくろ、

桂枝、はた、没葉、蘆会

および乳、鳥の無花果、
如何に世のほひを積むも、――

さならずば、

もしさならずば――

汝いかに陳じ泣くとも、

あるは、また

護摩炊き修し、伴天連の救よぶとも、

ああ遂に詮業なけむ。いざさらば

接吻の妙なる蜜に、

女子の葡萄の息に、

いで『ころべ』いざ歌へ、

わかうどよ。

この詩の中で用いられた「邪宗」の語句は、

「逃れよ、早も邪宗門外道の教」

という異教徒である立場から「外道の教」とみられ、おとしめられてうた

われている。

邪宗門秘曲

われは思ふ、

末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。

黒船の加比旦を、

紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを、

句 鋭きあんじやべいいる、

南蛮の棧留縞を、

はた、阿刺吉、珍砲の酒を

目見青きドミニカびとは

陀羅尼誦し夢にも語る、

禁制の宗門神を、

あるはまた、血に染む聖礎、

芥子粒を林檎のごとく見すといふ

欺罔の器

波羅韋僧の空をも覗く

伸び縮む奇なる眼鏡を。

ところが、「邪宗門秘曲」になる

と、このように共感相半ばしながら

「邪宗」が捉えられ、どちらかという

と「あこがれ」を秘めながらうたわれているのである。

私の童謡



内野潤子
(歌人・エッセイスト)

ものの本によると、老人は大きな口をあけて童謡をうたいなさい、それが認知症の予防にもなるし、気持ちも前むきに明るくなると書いてあった。

そんなことを言われなくても、私は童謡がとても好きで三人の子供に、六人の孫に今も同居の曾孫にいろいろ季節にふさわしいものをうたってきかせる。しかし数ある童謡も自ら消えてゆくもの、又今も生き生きと残っているものがあるのは、本当に不思議な思いがする。言葉が秀れていても曲がつくと、そのお互いのリズムが、ぴったりしているものはやはりうたいやすいし体が弾むのである。

私が何気なく口ずさむと、現在五才

の曾孫は、自分の保育園でうたっているうたを、老人の私が知っていることを不思議そうに一緒にうたったりする。

これは童謡ではないが、「糸をくるくる糸をくるくるひっぱってとんとんとん」という手あそびがあり、私をそれうたったら曾孫は「ちがうよ、糸をまきまき糸をまきまきひいてひいてとんとんとんだよ」と注意された。こういうものも、少しずつ変化してそれでも続いているのだとなつかしかった。

今手元に岩波文庫の六十年程前出版された「日本童謡集」与田準一編を見ると、大正昭和の童謡がほとんど網羅もうらされていて、多分夫が私に買ってきて

くれたのだと思う。

私の好きな「黄金虫こがねむし」の歌は曾孫も好きで二人で今もよくうたう。

野口雨情の作で、曲は中山晋平という童謡の大家の二人の力もあるのだろう。

「黄金虫は 金持ちだ。金蔵くらたてた蔵たてた。 飴屋で水飴買って来た。」と大変わかりやすく楽しい歌で、二番は終わりが「子供に水飴なめさせた」というおいしい歌でもある。

黄金虫は体の色が虹のように美しく光っていて、幼い頃見たことがある。この虫をダンスに入れておくと着物が増えるという言い伝えもあった。美しい虫が競きつつかまえるから、た

ちまちあたりから消えてしまう。

幻となった黄金虫を、作者はこのよ
うな童謡にして、夢の中で再現させた
のだろう。

水飴のおいしい甘さが、幼い児には
忘れられないあこがれでもあったのだ。

曾孫が赤児の頃から、この歌をうた
いつつ抱いて体をゆらすと嬉しそうに
笑った。

保育園ではどんな歌をうたうの、と
きいたら「かえるのうたが、きこえて
くるよ」をうたうらしい。これは何人
かずつがかたまりを作り、次々に歌を
追いかける輪唱で、そのハーモニーが
子供むきなのだろう。しかし幼い子は
みんな負けじとばかり大声を出すから
多分相当なやかましさと想像する。

梅雨になって「アメアメフレフレ
カアサンガ」という「アメフリ」のう
たも私はよく一人でうたう。

これは北原白秋の作で、大正十四年
に「コドモノクニ」という絵本に書か
れた歌らしい。

なぜか原本は全部カタカナなのであ

る。

雨の降る日、母親が子供を迎えに来
るといふ内容で、傘のない子が濡れて
泣いているのをみて「カアサンボクノ
ヲカシマシヨカ。キミキミコノカササ
シタマエ」と物語り風なのが面白い。

そして自分はお母さんの蛇の目傘に
入って帰るといふのがかわいい。しか
し蛇の目傘を今持っている人はいるだ
ろうか。

日本国内でもこの傘を造る店が一軒
とかテレビで見たことがある。

童謡の中には、その時代ならではの
生活の匂いがしている。

大正時代のものは、なんとなくおだ
やかで夢がある。

昭和になると「かもめの水兵さん」
とか「お山の杉の子」など出てくる。

昭和十九年のこの歌は戦後改作され
たらしいが「お国のために」という言
葉が残っている。私自身が好きで必ず
うたうのは、やはり大正十年の「赤
蜻蛉とんぼ」で、三木露風の詩の味わいは実
に深く、うたった後の心を何度もくり

返す余情がある。

曲もまた第一流の山田耕作なのでこ
れは名作と思う一つである。

「夕焼け 小焼けのあかとんぼ 負
われて見たのはいつの日か」という出
だしから、次の「山の畑の桑の実を
小籠に摘んだはまほろしか」の流れの
よさ、哀れさ、幼くてまほろしいう
に思われる桑の実の味、口を赤くして
食べたことだろう。桑は大切な蚕まご
なので、当時はどこにも植わっていた
のも分かる。又その実の甘酸い味も忘
れがたいのだ。

そして自分を背負ってくれたり、一
緒に桑の実をつんで食べた女の子。今
でいうお手伝いさんは、当時としても
早すぎる十五歳で他家の嫁になってし
まった。その後はどんなくらしかと案
じて、多分働きづめで何の知らせも
なくなってしまう。たつたこれ丈の童
謡に当時の貧しかった少女のすべてが
込められているのは実に見事と思いつ
つうたっている。